【vol.18】インターバルの呼び方と、メジャースケールの重要ポジション

どうも、大沼です。

前回、全ての音楽理論の基礎となる、
『メジャースケール』の内容に入っていきましたね。

ここ最近やっていたことから一転、テキストの文章量が増えました。

前回、新しい音楽用語も出てきましたね。

そう、今回のタイトルにもある、

『インターバル』

の事です。

インターバルの概念は音楽理論を学ぶのに、必須の知識です。

もう、これがわかっていないと、
音楽理論(というか音楽の構造全般)が全て理解できない、
と言っても過言ではありません。

この先の内容も、その『インターバル』を理解している事を前提として、
スケール理論、コード理論など解説していきます。

C メジャースケールに続いて、『必須事項ばっかじゃねーか！』、
と思うかもしれませんが、でも、そうなんです。

必須事項なんです。笑

仮に、このような必須の知識を、すでに全て覚えて理解しているのであれば、
おそらくあなたは、今、ギターの上達に悩むと言う事は、ほぼ無いでしょう。

なぜなら、そう言うレベルに達している人は、

『問題が出てきたとしても、解決策を自分で見つけられるから』

ですね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

自分で耳コピも出来るし、オリジナルの練習メニューも作れるし、
アドリブも作曲も出来るし、と、大概のことが可能なはずです。

何度も言っていますが、この講座は、
あなたにそういうレベルに到達してもらう為の講座です。

「自由にギターが弾けるようになりたい」という人は沢山いますが、
当然、そこにいくまでには、色々とやるべきことがありますよね。

その『自由』までにある、色々な障害や困難をぶち破っていく為の
知識と技術をマスターしてもらうのがこの講座の目的です。

では早速、今回もやっていきましょうか。

今回覚えることは、

・『ダイアトニックスケールという言葉の意味』

・『インターバルの呼び方』

・『メジャースケールの代表的なポジション』

この 3 つです。

さて、前回は C メジャースケールを例に、メジャースケールの仕組みを学びました。

ちょっと覚えることが多かったので、要点をまとめてみましょう。

要点は 3 つありましたね。

・メジャースケールは全 7 音で構成されている

・『インターバル』とは、ある音と、ある音の距離を数字(とアルファベット)で表したものである

・メジャースケールとは、
『トニックから、全全半全全全半のインターバルで音が並んでいる音階のこと』である

と、この 3 つです。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

これを基本に、今回の内容を学んでいきます。
ではまず、先ほども書きましたが、1 つ目はこちら。

・『ダイアトニックスケールという言葉の意味』

これについてやっていきましょう。

さて、『トニック』と『スケール』については、前回のメジャースケールの時にもやってますし、
ペンタでも少し解説しましたね。

『トニック』は『主音』、『スケール』は『音階』という意味でした。

では残りの 1 つ、『ダイア』。

これなんですが、音楽用語としては、大方『ダイアトニック』までで一括りで、
意味としては、『全音階的な(何か)』になります。

『全音階的な』と言われても、「なんだそりゃ」と言う感じだと思いますが、
『クロマチック＝半音階的な(何か)』と、対になっている言葉ですね。

『クロマチック(半音階的なもの)』と対になっているので、『ダイアトニック』と言う単語の付くものは、
『全音階的なもの』をどこかに含んでいるわけです。

ギターの指板上で視覚的に見るならば、『クロマチック(半音)』は、ある音とある音が 1 フレット分の距離にあることを意味し、『全音』は 2 フレット分の距離にある事を意味します。
(※例えば、ミとファは半音、ドとレは全音の間隔(音の距離))

以上の事を踏まえて考えると、『ダイアトニックスケール』と言うモノは、大きく捉えるならば、
そのスケールの中に、『全音的(な部分)』を含んでいる、と考えられますね。

我々がやっている音楽(≒ポピュラーミュージック)は、基本的には、1 オクターブを 12 等分した、12 平均律を使って構成されています。

ギターで見ると、「1 弦開放の E 音」から、その 1 オクターブ上の「1 弦 12 フレットの E 音」まで、12 個フレットが打ってあるので、普通に弾くのであれば、最大 12 音(12 種類の音が)出せるわけです。

この 12 音は、フレット 1 つ分の距離で並んでいるので、クロマチック(半音)な音列(≒音階、スケール)ですね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

じゃあ次に、この 12 のクロマチックな(半音的な)音の列の中に、『全音＝音と音の間が 2 フレットの距離』をいくつか含めてスケールを作ってみると、鳴らす音(スケールの構成音)の数が、12 音から少し減るわけです。

で、今、学んでいる**『メジャースケール』**なんですが、

『全全半全全全半のインターバルで音が並んでいる、全 7 音構成のスケール』

でしたね。

と、言う事は、とりあえずここまでの解説を踏まえて考えると、

『メジャースケールは、全音(的な距離関係にある音)を含む音階』

と見ることが出来るので、

『メジャースケールはダイアトニックスケール(の 1 種)である』

と、言えそうですよね。

ここで結論を先に言ってしまうと、『ダイアトニックスケール』と言う言葉は、ほぼ、
そのスケールの中に、

『全音の距離を 5 つ、半音の距離を 2 つ含むスケール』

の事を指します。(※メジャースケールがそうですね。)

これは何故こうなっているのかと言うと、古代ギリシャ音楽のテトラコルド(テトラコード)と言うものが元なのですが、そこについては現段階では別に気にしなくても OK です。

とりあえず今は、

『12 平均律の 12 の半音関係にある音列の中に、全音間隔を 5 つ、半音間隔を 2 つ入れて音階(スケール)を作ると、全 7 音構成のスケールが構成される』

と、こう覚えておいてください。

で、以上の解説を簡潔にまとめると、実質、**『ダイアトニックスケール』**とは、

『1 オクターブの中に、全音の距離を 5 つ、半音の距離を 2 つ含む、全 7 音構成のスケール』

と、そう言う事になります。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

(※細かい話は後々しますが、一般的な文脈では、西洋音楽の調性に伴う、
教会旋法(チャーチモード)と分類されているもの(スケール群)を指しているようです)

(※なので、自分で勝手に 1 オクターブ内に、全音 5 つ、半音 2 つを含むスケールを作っても、
それをダイアトニックスケールとは呼べない事になりますね)

ちょっと大雑把な分類だと、『ダイアトニックスケール』≒『全 7 音構成のスケール』みたいにも考えられますが、正確には 7 音構成のスケールは『ヘプタトニックスケール』と呼びます。

『ヘプタ』はギリシャ数字で、『7』の事ですね。

なので『メジャースケール』は 7 音構成なので、『ヘプタトニックスケール』の 1 種でもあります。

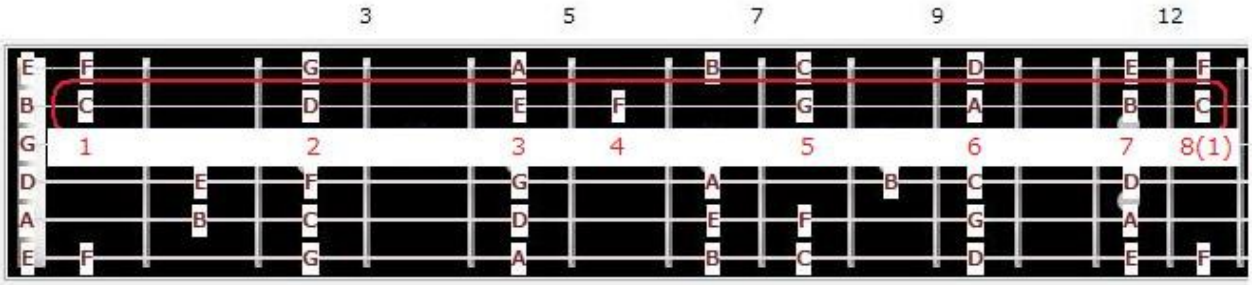
で、もちろん、ここまでの解説からも推測できる様に、メジャースケール以外にも、
ダイアトニックスケールには種類があります。

それについては、今後やっていきますので、少々お待ちください。

と、言う事で、『ダイアトニックスケールの言葉の意味』については以上にです。

では、次に『インターバルの呼び方』についてやっていきましょう。

まずは、前回の指板図をもう一度確認しておきます。



この図では各音に番号がついていますね。

CDEFGAB の順に、1234567 となっています。

これは番号自体はそのまま見て良いんですが、
音楽理論では、これを『インターバル的な呼び方』で呼びます。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

分かりやすいので、このままCメジャースケールを例にしますね。

まずは最初のC音。

これはCメジャースケールのトニックですね。

なので、一番最初の音は、そのまま**『Tonic(トニック)』**

もしくは**『1st(ファースト)』**でも良いですが、多くの場合トニックと呼びます。

日本語ではインターバルを表す時**『度(ど)』**という言葉を使うんですが、
その場合は**『1度(いちど)』**と呼びます。

次の、**トニックから見て、2番目の音**。(※Cメジャースケールだと D音)

これもそのまま**『2nd(セカンド)』**と呼びます。日本語では**『2度(にど)』**。

トニックから見て3番目の音。(※Cメジャースケールだと E音)

これは**『3rd(サード)』**と呼びます。日本語では**『3度(さんど)』**ですね。

トニックから見て4番目。(※Cメジャースケールだと F音)

これは **『4th(フォース)』**です。日本語では**『4度(よんど、よど)』**

トニックから見て5番目。(※Cメジャースケールだと G音)

これは **『5th(フィフス)』。**日本語では**『5度(ごど)』。**

もう分かると思いますが、残りも概要は同じです。

トニックから見て6番目。(※Cメジャースケールだと A音)

これは **『6th(シックス、シクス)』。**日本語では**『6度(ろくど)』**です。

トニックから見て7番目。(※Cメジャースケールだと B音)

これは **『7th(セブンス)』。**日本語では**『7度(ななど、しちど)』。**

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

と、インターバル的に各音を呼ぶとこのようになります。

全ての呼び方に言える事なんですが、どれも、**トニック(1st)から見て何番目の音なのか？**
と言う考え方に基づいて、数字が振ってありますね。

で、次に、7 度まで行って、次の音に行くと、最初のトニックに戻ってきますよね？
(※C メジャースケールの場合、7 度(B 音)から 1 度(C 音)へ)

その時、トニックは 1 度に戻ってきたとも言えるし、7 度の次の 8 度とも言えます。
もしくは 1 オクターブ上のド(C メジャースケールの場合)とも。

これについての解釈は、**トニックでも、1 度(1st)でも、8 度でも、オクターブでも、どれでも OK です**。

実際のプレイヤーの観点からすると、1 度と 8 度の両方の視点から見ておくのがベストですが。

よく、テンションコードで 9th(ナインス)とか、11th(イレブンス)とか、
13th(サーティーンス)とか出てきますね？

これはトニックから 1 オクターブ上のトニック(8 度)まで進んで、また次の一周をすると見た場合、
そのまま数字を進めていった時の呼び方です。

C メジャースケールで言うならば、

C(tonic、1st) ⇒D(2nd) ⇒E(3rd) ⇒F(4th) ⇒G(5th) ⇒A(6th) ⇒B(7th) ⇒C(tonic、8th、oct)
⇒D(9th) ⇒E(10th) ⇒F(11th) ⇒G(12th) ⇒A(13th) ⇒B(14th)

と、そのままずっと数えていった場合ですね。

このオクターブ(8 度)より上の数字で、テンションの表記として使うのが、
9th と 11th と 13th と、この様になっています。

さて、以上が、今回覚えるインターバルの呼び方です。

インターバルにはさらに、それぞれの音に分類としてアルファベットをつけるのですが、
それは今後やっていきますので、今回は基本的な数字での捉え方を覚えましょう。

これもただ、順番通りに音に番号を振っただけですから。
インターバルの番号を言われて、瞬時に音の判断が出来るようになるまでは、
少し慣れが必要ですが、やっていけばそのうち慣れてきますので。

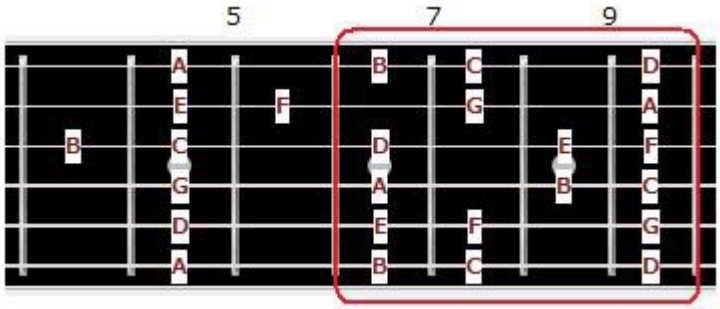
Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

今後は、この番号の呼び方(インターバルでの呼び方)が増えてきますので、
しっかり理解しておいてくださいね。

では、今回最後の内容として、**メジャースケールの重要ポジションを 3 つほど覚えましょう。**

これまでの様に、C メジャースケールを使って、6 弦ルートから 2 つ、5 弦ルートから 1 つ、
代表的なスケールポジションを練習します。

図、C メジャースケール、重要ポジション 1、(6 弦ルート)

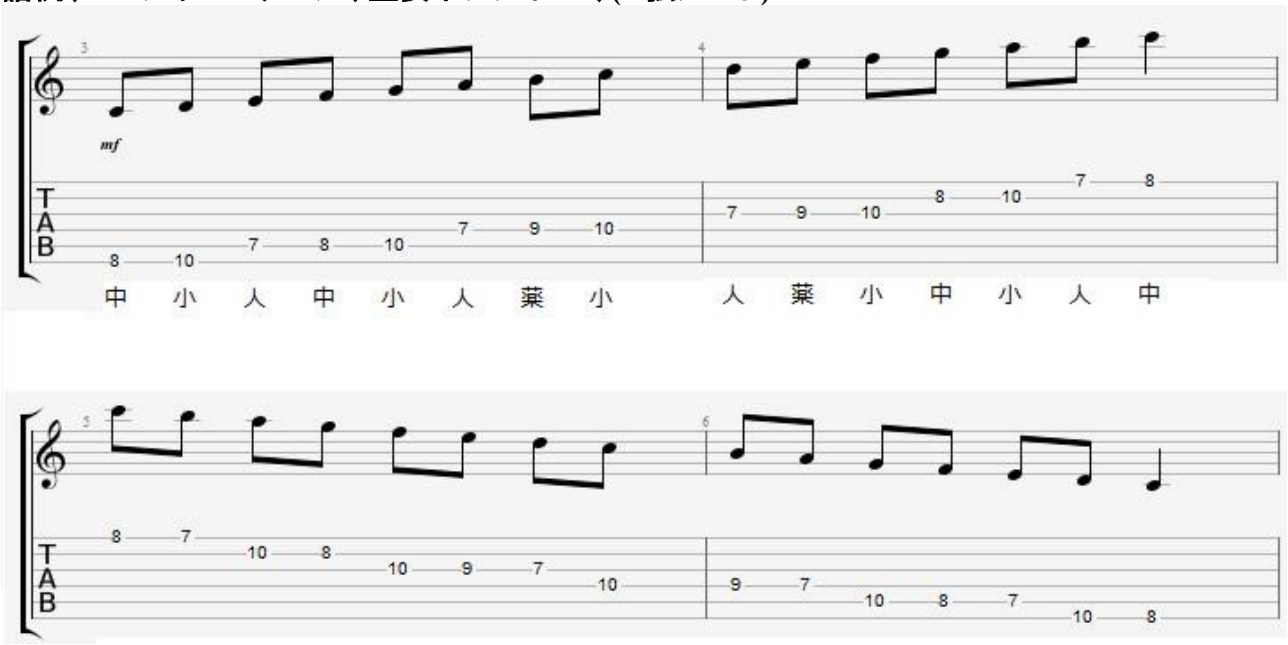


今回は、このポジションを指使いを固定して弾いてみましょう。

7 フレットを人差し指
8 フレットを中指
9 フレットを薬指
10 フレットを小指

と、以下の譜面の表記を参考に、上昇も下降もフレット毎に対応する指を固定してください。

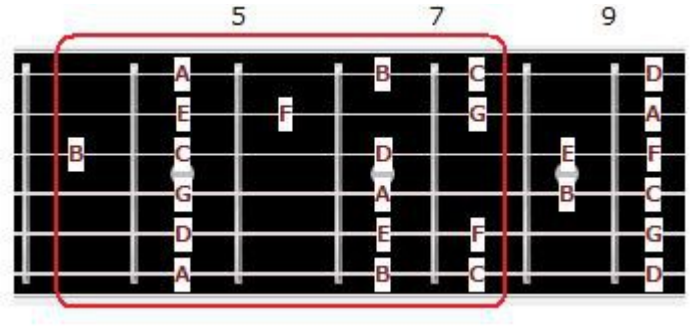
譜例、C メジャースケール、重要ポジション 1、(6 弦ルート)



(※後の譜面も同じように、指をフレットごとに決めて、使う指を固定します)

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

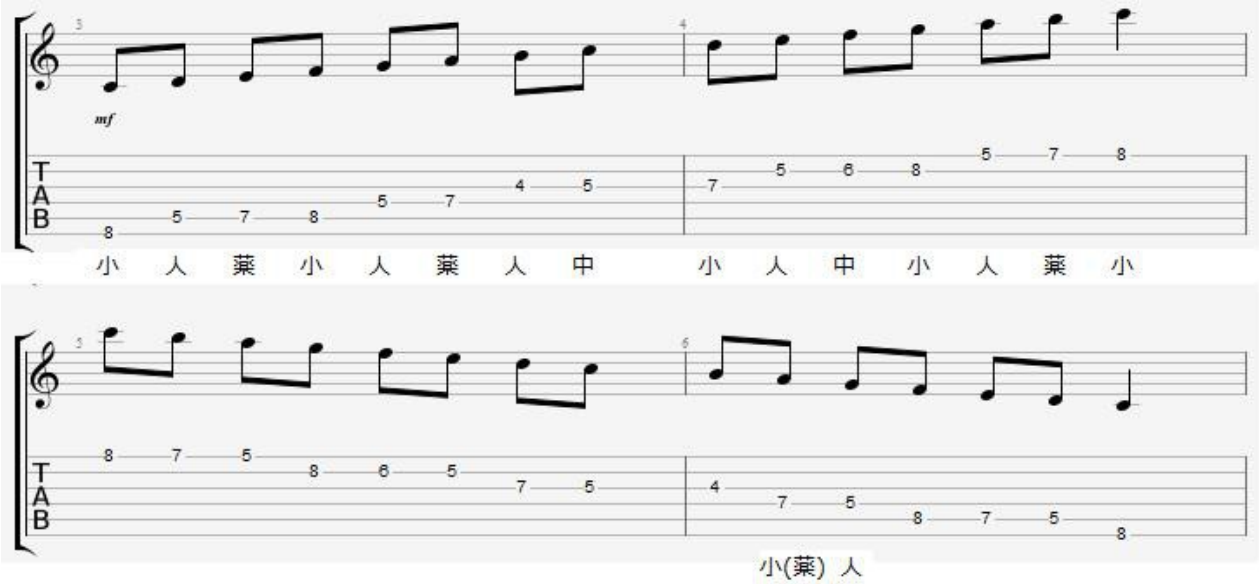
図、C メジャースケール、重要ポジション 2、(6 弦ルート)



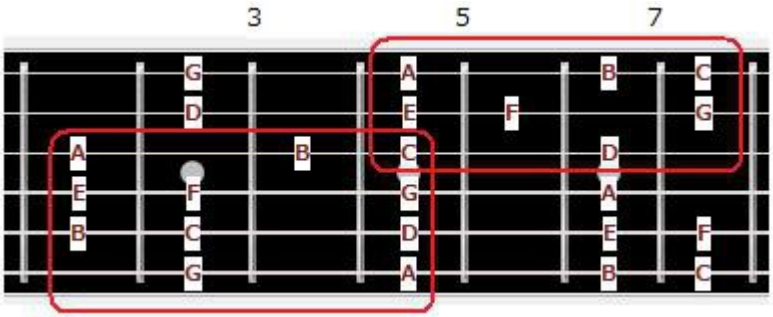
5 フレットを人差し指
6 フレットを中指
7 フレットを薬指
8 フレットを小指

(※3 弦のみ、4 フレットを人差し指、5 フレットを中指、7 フレットを小指で弾きます)

譜例、C メジャースケール、重要ポジション 2、(6 弦ルート)



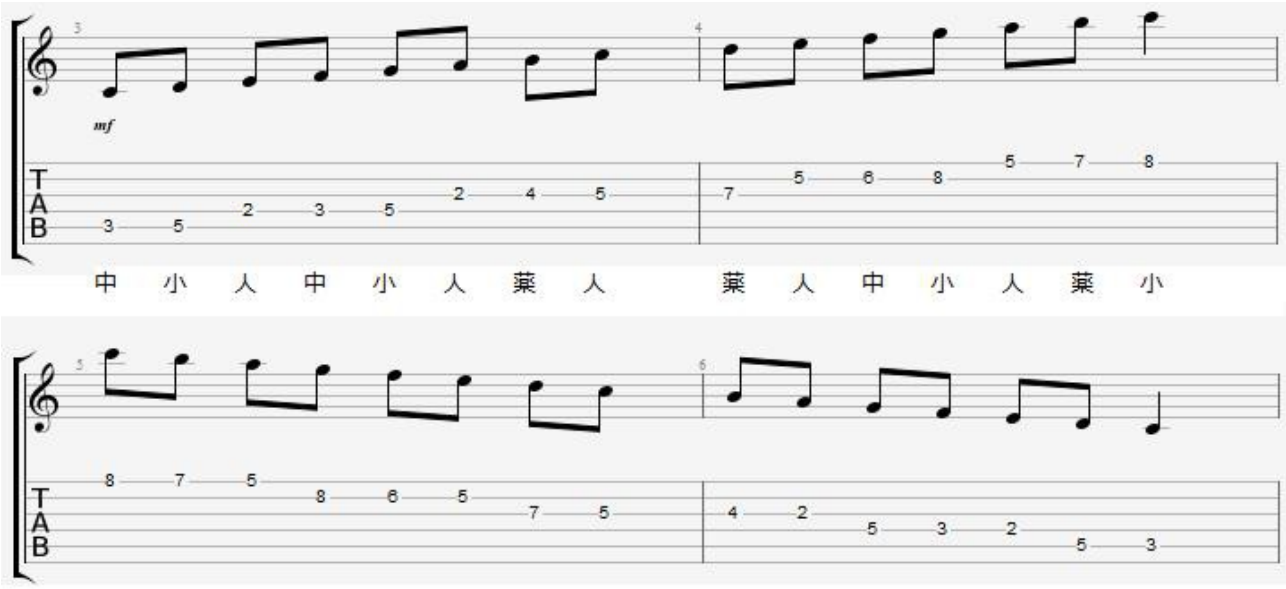
図、C メジャースケール、重要ポジション 3、(5 弦ルート)



Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

ここは、この図の様に弾く場合、指使いが特殊になるので、
譜面の指の指定をよく確認してください。

譜例、C メジャースケール、重要ポジション 3、(5 弦ルート)



いままでやってきた、ペンタのポジションと被る場所もあるので、
その辺りも確認してみてください。

この 3 つのポジションは、楽曲の中でめちゃくちゃ使うので、しっかり覚えておきましょう。

では今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved